

佐 啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佐啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

経験は最良の師

林 博樹

今年の夏はとにかく暑い。よく耳にする猛暑日なんていう言葉はひと昔前にはなかったはず。熱中症と新型コロナウイルス感染症が中心のニュースを聞きながら、さて、佐啓の原稿締め切りが近づいてきたけど、どうしたものか。もともと文章を書くのは苦手なのに：無い知恵を振り絞っても出ないものは出ない。飾った文章も書けないので思ったままを綴ってみる。



私は平成九年四月、佐啓会ふる里学舎に入職した。新人の時は右も左も分からず、あらゆることが新鮮で刺激的だった。朝早くから利用者とタケノコを掘りに行ったり、草刈りやシイタケ栽培をしたりと体を動かすこ

の頃、結婚をして子供を授かった時期であったが、ある時、親御さんに「子供が生まれてから、接し方が丸くなったね、やっぱり子供ができるとう違うね」と言われたことがあった。ハッとした。逆を返せば、「子育てを経験していない若い職員が」という事だと思ふ。悪気があつて言つた訳ではないのは分かっているが、やはり、我が子と思う親の気持ちを理解していたつもりになつていたのである。利用者の親代わりをするのが支援、というのはおこがましいが、兄弟姉妹くらいの関わりをしていこうと言うのが、常々理事長から言われていることである。

「妹さん元気？」私の妹を知る親御さんが声を掛けてくれる。「まあ、何とかやつてゐるみたいですよ」と答える。妹が通学していた特別支援学校時代にお世話になつた方との会話。知的障害のある妹はふる里学舎とは別の通所施設でお世話になつてゐる。



二年目からは、生活係という寮内の業務や家族の対応などが中心の所属となつた。職員の基本はトイレ掃除との教えのもと、毎日のスタートはトイレ掃除から始まり、各居室のベッドメイキング、施設内の掃除をひたすらしていた。また、家族との対応では、利用者が帰省をする際に親御さんと話をする機会が沢山あつた。親御さんからは「先生、お世話になつています」「迷惑かけていませんか」と話しかけられることも多くなつた。仕事に慣れてきた私は、自分の親と年代的に変わらない家族に「大丈夫ですよ」と分かつたような答えをしてゐたと思ふ。今思えば、若い自分に気を遣つてゐたに過ぎず、まさに「物言えぬ家族」であることに気付いてゐなかつたのであろう。

通所部に異動になつてからは、毎日のように家族とのやり取りがあり、今思えば色々と生意気なことも言つてゐたと思ふ。こ

通所すること妹が小学校一年生の時、私は五年生であつたが、その頃は障害があるとかはあまり気にしておらず、面倒を見ながら通学してゐた気がする。ある日の授業中、私の教室の廊下を見ると、妹が一人でニコニコしながら手を振つてゐるではないか。私は慌てて「先生！ちょっと（妹

を）教室に戻してきます」と言い、教室に戻しに行つた。きつと妹の先生も捜してゐただろう。前後の状況は記憶にないが、なぜかその場面だけは今でも鮮明に覚えてゐる。また、当たり前のことができないので、怒つてよくお仕置きみたいなことをした記憶がある。その時に親から注意された覚えはないが、きつとその時の気持ちには複雑だつたろう。もちろんその当時は福祉なんていう言葉も知らなかつたが、兄として面倒を見なければと思つてゐた。私が中学生になり、それなりに思春期を迎えると障害のある妹の存在に恥ずかしさを覚え、友人に聞かれれば答えたが、意図的に兄妹の話にならないようにしてゐた。高校、大学になれば、同時期に同じ学校に通学することもなかつたので、全く気にしないという訳でもないが、親に任せっぱなしであつた。当の妹は地元の中学校に通つてゐたが、今思えば、もちろん勉強についていけないわけもなく、つらい思いもしたのではないだろう。高等部から当時の養護学校に通学してゐる。養護学校時代に知り合つた生徒さん、親御さんと数年後、ふる里学舎で関わることになるとは知る由もなかつた。



私は福祉系の大学に進学した。将来、一般企業でスーツを着て働くイメージがなく、人の為になる仕事に就ければ良いかなと漠然と考えて学部を選んだのだが、潜在的には妹のことが頭の片隅にあつたのだろう。就職先を探す時には、知的障害の施設に就職すれば、先々妹のことが何とかなるのではないかと思つてゐた。ふる里学舎の採用面接を受けた時に、里見理事長から、「うち（ふる里学舎）で仕事をした時に、妹さんのことで、職員のちよつとした発言等で君自身が傷つくことがあると思うが、その覚悟はあるか？」と聞かれ、調子よく「大丈夫です」と答えたのを覚えてゐる。しかし、本音は何よりも、妹のことも含めて受け止めてくれたのが嬉しかつた。さて、話を戻して。年々事業規模が広がつていく中で、平成一八年四月から東京都文京区の大塚・小石川福祉作業所の運営委託を受け異動（現・ふる里学舎小石川へ）となり、また、平成二三年七月に開所したふる里学舎静風荘への異動。県立の身体障害者施設を引き継ぐ形で、身体に障害がある方の介護を中心とした入所施設に勤務。新規事業の開所に関わる機会をいただいた。どちらの施設も利用者や家族は、運営、職員が替わることへの不安が大きかつたと思ふ。これまでは知的障害の方の支援がほとんどなので、身体障害の方の支援は違つた意味で勉強となつた。よく相手の立場にたつた支援を・と言われるが、実際にその立場になつてみなければ分からないし、分かつてゐる等と驕つてはいけないことを改めて気付かされた。ある時、「背中が痒くても自分でかけない、涙を拭くこともできない。誰かの手がなければ何もできないのが辛い」と言われ、何と答えれば良いのか分からず、頷くことしかできなかった。障害を負つてからの辛い思いを乗り越え、何年もかけて障害を受容してきたのだろう。特に途中で障害を負つた利用者がどのような気持ちであつたかは想像に及ばない。直接的な介護だけでなく、ひとりの人として真摯に向き合うことが、自分ができる唯一のことだと教わつたのも静風荘の利用者であつた。



今年の四月一日に施設長を拝命した。自分の兄弟に障害者がいるから特別な支援ができる訳ではないが、少しでも利用者や家族の気持ちに寄り添うお手伝いをしていきたい。最近では、兄弟に障害がある若い職員が入つてきてゐる。私も含めて、時には辛いことがあるかもしれないが佐啓会に採用されたのは、その兄弟が繋げてくれた縁だと思つて、困つてゐる人の役に立つ仕事を一緒に頑張つてくれたらと思ふ。また、これまで関わつてくれた利用者、そして家族との縁を大切にしながら、同じ志を持つ職員と様々な困難を乗り越切つて有意義な時間を過ごせたらと思ふ。（ふる里学舎あすみが丘施設長）

コロナ禍と

豪雨災害に思う

小阪雅信

新型コロナウイルスは依然世界中で猛威を振るい、社会のあらゆる分野に深刻な影響を与えて落ち着く気配を見せません。そんな中、市原で入所している息子（二十九歳）は変わりなく、元気に過ごさせていただいております。感染防止のため、恒例の利用者家族一泊旅行や納涼祭が中止され、三月から入所者の定期帰省も行われていません。昨年の台風十五号による大規模停電の際にも感じた事ですが、「子供たちはふる里学舎を守る」という気迫が伝わってくるようです。スタッフの皆様のご尽力と公私に渡るご苦心の賜物と、心より感謝いたします。

今春は、ふる里学舎の皆様をはじめ、医療関係や社会を回すために奮闘されている方々に負い目を感じつつ、今の自分にできるのはこれだけと愚直にステイホームしておりました。たまに外に出ると、満開の桜が美しく、これまでにない感動的でした。あまりに久しぶりだと、今度は近くのツツジが見事に咲き誇り、緑の葉が太陽にキラキラ輝いていました。花に癒され、緑に勇気づけられます。見渡せばカラスも元気、散歩の犬たちも元気です。マスクをして暗い顔で目を伏せて歩いているのは人間だけでした。緊急事態宣言が出て、人間が活動を抑えてじっとしていたら大気と河川がきれいになりました。自然界にとって、世界中で猛威を振るっているのは新型コロナウイルスではなく、実は人間の方だったのかも知れません。

自然界といえ、近年異常気象による風水害が後を絶ちません。この一年、「数十年に一度のこれまで経験したことのないような〇〇」を何度経験したことでしょう。異常気象は化石燃料の使用や森林の伐採による地球温暖化が原因とされています。地球温暖化は自然災害だけでなく、伝染病を媒介する蚊などがこれまで

いなかった地域に広がったり、シベリアの永久凍土が溶けて地下深く封じ込められていた未知のウイルスが出てきたりする危険性も指摘されています。今も昔も人間の自己中心的な欲求の度合いは変わらないのかも知れませんが、産業技術の発達とグローバル化の進展により、その欲求が及ぼす負の影響も桁違いに大きくなっているのだでしょう。物質的な豊かさと便利さを最優先し、人と自然への感謝と謙虚さを疎かにしてきた私たち人間への大自然からの警鐘が続いているように思えてなりません。



令和元年 台風 19 号直撃

昨春秋、房総半島の風水害をきっかけに、初めて災害ボランティアに参加しました。千葉の市原市と長柄町に始まり、福島県いわき市、宮城県丸森町、栃木県佐野市で床上浸水したお宅の泥出し、泥まみれになった畳や家財道具の運び出し、土砂崩れで埋まった排水溝の泥かき等をさせていただきました。他人の苦難を我が事と受け止め、力を合わせて乗り越えようとする人間の強さ、優しさも捨てたものではありません。どこも全国から様々な人たちがボランティアに来ていました。阪神淡路大震災からボランティアを続けている大ベテランの女性、車で寝泊まりをして数週間活動している高齢の男性、前年の西日本豪雨災害でボランティアのお世話になったのでその恩返しにと広島から市原にきていた大学生、学校が三連休なのでと兵庫県から一人、丸森町まで来ていた男子高校生、札幌から来て泥運びをしていたお医

者さん、以前から休みの日には各地で災害ボランティアをしているという東京のイケメン五人組……。五人は仕事仲間と言っていました。あとで名の知れたロックグループだと聞きました。現地では自然災害の威力と恐ろしさを目の当たりにし、被災された方々や全国から集まった老若男女と接して、自分のような経年劣化して凝り固まった心でも奥底から揺り動かされるのを感じました。

最後に、ふる里学舎の家族会には清掃、環境整備、販売のボランティア活動があります。参加している親御さん達にとっては、ふる里学舎への感謝の気持ちを感じて表すためにも場であり、愛しい我が子らがより良い環境で過ごせるようにと願う親心の現れであるように思います。どんなボランティアも一人の作業量はたかが知れていますが、大勢集まれば大きな成果が生まれます。そして集まれば集まるほどに、支援する側もされる側も、みんなが笑顔になってお互いに元気をもらい合うのがボランティア活動の不思議です。そういう意味で、この難しい時代こそ、ふる里学舎のボランティア活動も参加される方がもともとと増えればいいなと思います。

（ふる里学舎 保護者）

過去最高

楠元洋海

「MEGAドン・キホーテ市原店での売上総額が過去最高となりました。」自分の報告に酔いしれ、自らの功績であるかのように報告したくなるが、事実は異なる。

令和二年の春、アピタ市原店はMEGAドン・キホーテへと業態変更により生まれ変わった。

思い返せば、日中活動で製作した作品をアピタ市原店内の一部をお借りし、販売をさせて頂くようになったのは、二十数年前の話。当初、年に一回から二回程、場所を貸して頂くだけで良いのでと軽い気持ちで担当者企画提案書を提出したが、ど

んな世界でもその道のプロはそんなに甘くはない。

「販売をするのは構いませんが、福祉だからといって甘くはしませんよ。集客が見込めない店舗を受け入れる事はできない。お客様に認めて頂けるよう全力でサポートしますから、本物の商品を出して下さい。」厳しくも温かなご指南と共に伝えてくれた物販のイロハと心構えから、福祉を言い訳にしてはならない事を学んだ。



MEGA ドン・キホーテ
UNY 市原店 作品展の様子

アピタ市原店における最初の転換期。利用者の皆さんへお支払いしていた工賃の増額を目指し一定額以上の収益を確保する事が急務となった。

あれこれと販路を広げようと奔走するなか、当時のアピタ市原店催事担当の方にご相談したのが、常設販売の始まりであった。

しぜん工房で製造したパンを主軸に毎週木曜日から土曜日に販売開始。法人内の各事業所で作品を持ち寄る。無添加ジャム、季節ごとの低農薬野菜、南房総からお届けする切り花、

益子地方の粘土を使用している陶芸品。それぞれの商品がお客様にとつての「いつもの〇〇」と生活の一部となつている様子が伺えた。ふる里学舎家族会からの販売ボランティアの協力もあり、順調に売り上げを伸ばすことが出来た。更に言えば、常設販売の開始は、継続した販売促進について考えるきっかけでもあり、以来その時々の特流に即すよう販売のあり方を見直してきた。

そして昨年度末には、里見常務からの提案により、更なる販促の旗頭として、ブランドینگチームが発足した。今の、そしてこれからの「ふ

る里学舎」を沢山の方知って頂き、ふる里学舎のファンを増やしていこう。時代にマッチした「ふる里」ブランドを作ろうというもの。今までの歴史を大切にしつつ、新しい時代でも成長し続けられるような礎を目指す事となった。

佑啓会としての販売に対する想いを共有する事から始まり、ブランドのコンセプトが決まる。

『地域の皆様に愛される存在になりたい みんなの「ありがとう」を繋げたい』

ふる里学舎の作品が、大切な人との繋がりを広げるきっかけとなつて欲しいと願いを込めた。

ブランドの顔となるロゴマークは、幾度もデザイン案を修正。みんなの想いが詰まった作品を輝かす一翼となるようなデザインを目指してきた。完成したロゴマークが、のぼり旗やレジ袋、プライスカードに印字された姿を見た時、ブランドینگチームの皆で自分達の子どもが生まれたかのように喜んだ。

しかし、親ばかと言われないか心配しながらも世に送り出した矢先の収益を確保する事が急務となった。あれこれと販路を広げようと奔走するなか、当時のアピタ市原店催事担当の方にご相談したのが、常設販売の始まりであった。

しぜん工房で製造したパンを主軸に毎週木曜日から土曜日に販売開始。法人内の各事業所で作品を持ち寄る。無添加ジャム、季節ごとの低農薬野菜、南房総からお届けする切り花、

益子地方の粘土を使用している陶芸品。それぞれの商品がお客様にとつての「いつもの〇〇」と生活の一部となつている様子が伺えた。ふる里学舎家族会からの販売ボランティアの協力もあり、順調に売り上げを伸ばすことが出来た。更に言えば、常設販売の開始は、継続した販売促進について考えるきっかけでもあり、以来その時々の特流に即すよう販売のあり方を見直してきた。

そして昨年度末には、里見常務からの提案により、更なる販促の旗頭として、ブランドینگチームが発足した。今の、そしてこれからの「ふ



ふる里学舎自慢の
ふっくら焼き立てパン

コロナ禍の中でも販売させて頂ける場所がある。多くの方に求められているという喜びは、限界までやろうというパン科職員の意気込みへと変わる。日の出前であった出勤時刻が、深夜日付の変わる頃にはパン工房の明かりが灯されるようになる。日々の売上の集計・時間ごとの販売分析から、明日の最善を模索。どうすれば、お客様の手に取って頂けるか。自分達の考えに自信が持てない時は、自然と売り場に集まってくれる多くの職員からの声に耳を傾ける。より良いものをいかに追及していくか、施設の都合で考えていないか、自己満足となっていないか、考えればきりが無い。

「ふる里」ブランドが、今まで積み上げてきた歴史を大切にしながらも、新しい事に挑戦し続ける佑啓会の象徴となるか否かは、これから自分たち次第である。

その挑戦する場を与えて下さり、ふる里学舎を応援してくれている皆様の支えの結晶こそが「売上総額、過去最高」であった。そしてこれからも、末永く宜しくお願い致します。

（ふる里学舎 係長）



編集後記

長い梅雨がようやく明けたかと思えば、厳しい暑さの夏。今年ももう少し厳しい暑さが続きそうです。

そんな厳しい暑さの中、コロナウイルス感染症の状況は落ち着かず、未だに三密やウィズコロナ等の新しい言葉が飛び交っています。

そんな気が滅入りそうな言葉をかき消してくれるのが元氣な利用者さんの笑顔です。こんな時だからこそ、皆で手を取り合い、笑顔で乗り切っていきたいと思います。

皆様が少しでも元氣になれますよう、佑啓113号をお届けします。
（支援員 五十嵐美紀）